

巻頭言 「聖書の天使」

宇野 元

20世紀は、想像力豊かな天使のイメージを生みだしています。

詩人リルケが「すべての天使はおそろしい」と歌った、か弱い人間と対極にある強靱な存在としての天使。画家クレーの、ときに愉快的、ときにさびしげな、ときに謎めいた天使たち。映画「ベルリン・天使の詩」の、大都市の疲れ切った人々にそっと寄り添う、地味な天使……

聖書の天使は、クリスマスに欠かせない存在です。クリスマスのロマンチックな雰囲気演出するのに欠かせない、というよりはるかに深い意味で。

イエス・キリストの誕生を記した、ルカによる福音書第2章の記述をたどってみますと、夜、野宿をして、羊の群れの番をしていた羊飼いたちに、突然、天使が現われ、うろたえる彼らに、恐れるな、わたしは民全体に与えられる大きな喜びを告げる、と、いって語った言葉が、クリスマスの知らせの中心になっています。そしてこの知らせは、羊飼いたちの口によって、ベツレヘムの町で言い広められることとなります。けれども、それは彼らから始まったものではなく、天使によるものでした。

今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼う葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。(ルカ 2:11,12)

聖書は、この乳飲み子とともに、神が世に来た、と告げています。この誕生は、偉大な始まりです。悲しみの多い世、荒野である世、暴力に満ちた世、また、灰色の空虚な現代の世に、未来へのたしかな望みを贈る誕生です。このことは、私たちの想像力を越えています。自分では思いつかない。告げられなければならない。そこに天使の役割が与えられています。聖書の天使は、イエス・キリストによる神の恵みが、私たち人間の創作ではないことを教えてくれます。

メッセージを伝えると、天使はたちまち消え去ります。現われたときと同じように。聖書の天使は、私たちの関心を自らに向けようとしません。私たちがメッセージの内容を思いめぐらすために。